

開催地名	奈良県桜井市
開催日時	令和5年11月29日(水) 13:30～15:00
開催場所	桜井市役所本庁舎2階 大会議室
語り部	茨島 隆 (青森県八戸市)
参加者	桜井市職員 40名
開催経緯	桜井市内には奈良盆地東縁断層帯が走り、最大震度7の地震が想定されているが、これまで大きな災害を経験したことがなく、災害時にどのような状況に陥るのか、どのような対応が求められるかなど、職員の災害に対する認識、意識が高いとは言えない状況である。講演をとおし、災害についての意識をたかめ、防災意識の向上につなげたい。
内容	<p style="text-align: center;">～東日本大震災の体験談・教訓について～</p> <p>(1) はじめに</p> <p>結論から先に話すと、地震災害・自然災害で被災者にならないで欲しい。災害を正しく恐れて、どうしたら助かるのかを体得して欲しい。特に津波災害の場合は、あれこれ悩んでいる時間はない。財産は守れない、すぐに避難する事が本当に大切である。</p> <p>(2) 被害状況</p> <p>国内の最大震度は、宮城県栗原市の震度7であったが、八戸市でも震度5強を観測した。市内でも揺れの違いがあるが、それは地盤の違いである。津波高に関し、八戸港は初め4.6mで記録されていたが、この数値を記録した直後に検潮所が被災し、正確な数値がわかっていなかった。後日、気象庁の痕跡調査により6.2mであったことがわかっている。尚、国内の最大の高さは、宮城県女川の笠貝島(かざがいじま)で43.3mだった。</p> <p>人的被害は通常だと行方不明者が減って死亡者が増えていくのだが、令和4年度と令和5年度を比べても大きく変わっていない。行方不明者が多いのは津波災害の特徴である。そして何より沿岸部を中心に大きな被害を受けた。八戸漁港の館鼻地区には12隻の漁船が打ち上げられ、その中でも最大の漁船は、184トンの中型イカ釣り漁船であった。海に戻すだけでもクレーン等で億単位の金額がかかる。津波の威力を感じずにはられない。</p> <p>市が開設した避難所は、最大69か所、避難者は9,257名であった。避難所運営に従事した職員は延べ1,933名で、避難所担当の職員だけでなく職員総出で従事した。全国の避難所に目を向けると、最後まで開設されていた避難所は、埼玉県加須市の旧騎西高校に設置されていた避難所で、福島県双葉町からの避難者4世帯5名が2013年12月27日に退去し、閉鎖されている。発災から1,023日後、約2年9か月後のことである。</p>

被災者への毛布配布を取ってみても、市内は停電中で車両での配布は容易ではなく、平常時と比べると、相当に時間を要し「毛布が足りない」「届かない」といった問い合わせが本部に多数寄せられた。また被災された岩手の方が避難所本部に相談に来てくれた。岩手の避難所では1人1日1個のおにぎりしかもらえず、それが1週間続き、命の危機を感じて、八戸の避難所に逃げてきたと言っていた。自治体が機能を失うことがないように行っていかなければならない。

保健・医療活動は「避難所で亡くなる人を出さない」というスローガンで、避難所巡回健康相談や家庭訪問等も行い、活動をしていった。また市民病院も普段から停電対策をとっており、病院の8割を自家発電で行なえるように備えていた。ただ発電機を重油で回していたため、普段取引している業者からは、思うように燃料を調達できず、秋田県の業者にまで範囲を広げて、調達先を探さなければならなくなった。

ライフラインに関しては、電気は停電後復旧までに、43時間を要している。津波被害が大きかった建物では、契約の解除をし、停電の解消に努めたと聞いており、実際は復旧までにもっと時間を要したことが推測される。電話回線も固定、携帯ともに繋がりにくい状況が3日間程度続き、特に携帯電話は発信制限により10回から20回に1回程度しか繋がらない状況であった。

交通は東北新幹線の復旧が早く、それでも4月29日に復旧した。JR八戸線は、八戸駅と岩手県の久慈駅を運行しており、線路が津波被害を受けたこともあり、1年の復旧期間を要し、2012年3月17日に全線で運転を再開した。

### (3) 命を守るためには

「自助」「公助」「近助」の三つの「助」(＝三助)で災害時の被害を軽減することが重要である。「自助」は自分の命を自ら守ること、「公助」は自治体による救助・援助のこと、その2つに合わせて、重要なのが「共助(近助)」である。「近助」とはプライバシーには深入りせず、日ごろから挨拶などをして、程よい距離感で、隣人に関心を持ち、困ったときに、助け合える関係を築いておくことである。内閣府が作成した阪神大震災における救助主体についての表を見ると、公助が1.7%しかない。公助がいか

に頼りないかが分かるだろう。

釜石の奇跡で注目された「津波てんでんこ(地震・津波の際は、家族のことさえも気にせず、まずは自分だけでも逃げる)」という三陸地方の教訓がある。この教訓で、釜石市の小中学生約600名のうち、親が引き取った1名を除き、全員が助かった。一方、宮城県石巻市の大川小学校では、児童74名、教職員10名が死亡・行方不明になり「大川小の悲劇」と言われている。校長が当時不在で、教頭が高台への避難の決断を渋り、高

台の急な傾斜を這って上がるのは危険であるから、標高の下の方に逃げる避難ルートを使って避難しようとした矢先に、津波に巻き込まれてしまったと言われている。この件は遺族側が学校側（県・市）側の管理責任問題として、裁判を起し、最高裁まで争うこととなった。学校側（県・市）が上告したが、最高裁で棄却され、令和元年10月に遺族側の勝訴が確定している。県・市の賠償額は14億3600万円と言われている。

また今回の地震で自治体の職員や庁舎が被災したことも教訓にあげられる。首長が亡くなってしまったり、職員が多数行方不明となったり、そして庁舎が被災すると、住基のデータもなく、罹災証明が出せなくなり、行政機能が麻痺した例もある。データのバックアップ含め、日頃から最悪の事を想定し、トラブルに備えておく必要性が大切になってくる。

#### （４）事前準備と災害時の対応

避難所、避難経路の確認や、家族の安否確認方法、また枕元にスリッパを準備しておくとかガラスや食器の破片を踏んでケガをしないなど準備は大切である。そして津波に関しては特に「引き返さない・海に行かない」ことだ。一度は避難したものの、家族が心配で車で家に帰ってしまった方と、同じく、一度は避難したものの自分の船が心配で海へ行き、流されてしまった方がいる。命より大事なものは無い。まず逃げる。そして避難指示が解除されるまでは戻らないことを徹底して欲しい。

近年はコロナ含め、地震+疫病などW災害で更に大変になることも想定される。想像もつかない事も多いが、出来る限りの準備は本当に大切になってくる。今回の教訓も踏まえて、繋げて行って欲しい。



開催地より

東日本大震災の経験を通し、大変だったこと・感じたことなど貴重なお話を聞き、いつ災害が起きてもおかしくないという意識を持つことができた。この講演をきっかけに防災意識をより高めていきたいと思う。